

る」という冒頭の一行だけを見出すことから云えるのではない。他の梶井の作品が完成される以前におびただしい草稿の類が多量にノートとして残っているにもかかわらずきわめて稀な現象としてこの十年の間私の記憶にあるが、それは梶井の美に対する執念のようにすら感じるのだ。近代文学の中で占める梶井の位置がどんなものであろうとも、私はやはり梶井の文学を考へることによって、雲が四十数年経てもやはり天城のあの空の中で異様な働きをし、梶井が一生懸命それを眺めた姿に一個の生き方のあることを認識したいと思うのである。梶井によって展げられた文学の生命がけっして甘いものでないことも梶井よりも何倍か分らないが生きていることよって分ればいいのだ。梶井にとつて大事にしたものを大事にしようというのではないが、梶井の生命への情熱や、虚無の中心点がその情熱の内から無限のように展開されたものの中から、その底にある美意識が彼の肉体と密着しているといった梶井を病者としてでなく扱っていいのだ。梶井との十年多少想われることはそういうことなのだ。文学にとつて十年などという歳月は短く、青きものだ。ただ青春にとつて十年という歳月は不思議な響きを持つ気がする。梶井がだが二十五歳から本格的に作品と全集でされている習作をのぞけば、三十二歳までの間は八年間なのである。だから青春のその不思議な響きがするのは当然だがそれ以上のなにかが、ある。これ

だが、これらにも増して私に感銘深いのは大正十四年に書いた「路上」である。

二、取立てていうほどでもない事件のなかに、これほど鬼気迫る危機感、それに自意識が籠められた作品にはお目にかかつていないからである。

三、梶井の作品に見出される人間の原感ともいうべきものは貴重だと思ふのだ。

大竹新助

一、冬の蠅

二、生命への意欲が溢れている点。

三、現在、平和ムードの中にあつて生命への極限が論外にあるような気がする。それでそれへの警鐘として意味があると思ふ。

からはきつと私自身その時期のような読み方も出来るかも知れない。梶井の短い生涯と共にそのまた短い小説の秘密はそうしたことを莫然と考えさす糸のようなものがあるのだ。ときにその糸は目立たない透明なものでつながっている。それは人間のさまざまな営みが、そうであるように、梶井はそれらの姿を少くとも伊豆湯ヶ島で書いたものやその構想であつたであろう「交尾」や「闇の絵巻」でそれらが人間を描いたと同じよう呼吸なし、行為をするのだ。だが宿命と言つたらいいのか、数少ない梶井の小説の中でそれらと違った方向の「のんきな患者」をその最後のものとした。ときに近代医学の発達を近頃新聞で見ると十年前に考えたことを、同じようなことを考へるけど、梶井の肉体は遠方に去つていても、その肉体の先のことよりもまだ容易に果していない梶井への私の仕事を思うのである。そうして同時に文学の姿勢や文学の根本をじっくりと見た、考えた梶井から学んでいかねばならないのだ。十年の中の私をあと十年というふうにいっしか考へていたのかも知れない。

アンケート

北川冬彦

一、私の好きな梶井基次郎の作品は幾つもある。なかで、「冬の蠅」「闇の絵巻」「交尾」などが殊にそ

増田晃、その『白鳥』

浅野 晃

かがやく安宿媛^{あすひめ}

三千代夫人の御子^{みこ}

いかにセント・アンヌの御子にもまして

無垢に憐れみ深くいつの世までも

哀しみまどふわれらの歎きを

いつくしみ見守りたまふか？

かの赤光にもたぐふべき

優しき御手とりて涙ながし

誰か御后を恋はざるものありや？

われけふ蛙なく佐保の川ちを

奈良坂を秋篠さい行きさまよひ

行きたどり 行き止まり 心天飛び^{あま}

日月も知らにいにしへ恋へども

あはれわが絃弱し、もろし
わが器病む しらべ副はず。
おお 願はくは御后よ

かの法華尼寺の天才に
御像つくる悦び与へ玉ひしごとく
わが絃にも感ありたまへ。

戦ひに勇みゆく子らのため
またそを送る母らのため 妻らのため
たとへわが絃切るとも 花ある頌を
讃への対句を 大いなる詩章を
祈りのうたをなさしめたまへ。

たとへわが名かの彫師のごと
消えゆくとも 亡びゆくとも
誤られゆくとも 変りゆくとも

天平の御国母

藤三娘の御后

われに第一の頌をゆるしたまへ。

これは増田晃の詩集「白鳥」のなかの一篇である。「母の需めにより光明皇后のおおどをなさんとして作りたる小さきおおど」といふ長い表題がつけられてゐる。「白鳥」のなかの代表的な作品としてよいと思ふ。

わたくしは増田晃についてほとんど何も知らない。おそ

一月某日、この詩集のおくがきを記し、そのあけの日に軍隊に入った。本は三月に、菊版のうつくしい本となつて刊行された。わたくしへのこの本の贈り主は、「著者遺族」であるから、このときには著者はすでに世にない。すると著者は、この詩集の原稿を小山書店に託して出征し、そして戦死したものと推察される。

今年の正月に亡くなられた伊福部隆彦さんは、わたくしにしばしば増田晃の名を口にされた。増田君はよい詩人であつた。惜しい詩人であつた。彼をみとめた人はごく少数である。君もその一人だ——といふ意味のことを、いくたびかわたくしに語られた。また、わたくしの「天と海」を紹介してくれた文章のなかでも、伊福部さんは、まるでわたくしが増田晃の後継者でもあるかのやうに書いてあつたと記憶する。してみると、わたくしは戦時中、増田の詩について何か書いたことがあつたのであらう。伊福部さんもわたくしの書いたものを見てゐたので、あのやうなことを云つたのであらう。遺族からわたくしに「白鳥」が贈られたのも、さうした縁があつたからなのであらう。いづれにせよ、わたくしの手もとには一巻の「白鳥」がある。わたくしは、この詩集を、大事に愛蔵してきた。わたくしは「白鳥」の詩を敬重する。「白鳥」の著者として、増田晃はわたくしの傍らにある。

ただ伊福部さんが、増田晃を浅野晃とおなじ性質の詩

らく彼についての若干の記憶があるべき筈のものが、失はれてしまつたのである。なぜなら、わたくしの手もとには、「白鳥」といふ彼の詩集がある。これは戦時中にわたくしに贈られたもので、不思議に空襲のときに焼けなかつたらしく、いまでもこのやうにわたくしの手もとにあるのだ。そして扉には、「著者遺族」と「白鳥会」との双方の名で、わたくしに贈る旨が記されてゐる。これによると、増田晃がすでにこの世を去つたあとで、「白鳥」はわたくしに贈られたものであつたことが分る。では詩人は、いつどこで歿したのか。わたくしにははつきりした記憶がまつたくなのである。ただ、この本のしまひに、「覚書」として著者の跋があるなかで、これもいよいよ最後のところに、かう記されてゐる——

「……入宮をあすに控へた今日、この些々たる一巻を以て御恩報じの幾分かでもなし得たであらうかと、ひとり思忝るのである」

これによつて、著者は入宮したことが分る。日付は「昭和十六年一月」で「豪徳寺小房にて晃誌す」とあるから、この年の月に、増田晃は応召したのである。そして「白鳥」の奥附には、「著作者 東京市世田谷区世田谷二丁目一二六八番地 増田晃」とあり、発行人は小山久二郎、発行所は小山書店で、昭和十六年三月十日の印刷、おなじく三月十五日の発行とある。すなはち著者は、昭和十六年の

人のやうに云はれたのは、當つてゐないと思ふ。はじめに掲げた「母の需めにより光明皇后のおおどをなさんとして作りたる小さきおおど」を見ても分るやうに、増田の抒情は蒼白な炎に憑かれた重おもしい抒情であり、それはすべてヘルダーリンのヘラスの讃め歌である。増田晃のヘラスはわが天平の御代であり、それはむかし青木繁が孤独のなかで夢みたものに他ならなかつた。「白鳥」には、ほかに「飛鳥寧案のための序歌」と題した長詩が、「その一」「その二」と二篇あり、いづれもすぐれたものであるが、またこの間の消息をよく示してゐる。いま「その二」から引いてみよう——

いくたびかわれ古都の長道をあゆむは
物語の故ならず 考証にもあらず

たゞここに東大寺の杜よりびびく
おもひしづめる梵音にふかく太息し、
くづれかけたる築地に沿はむうれしさに
薬師寺より招提寺へと往来せんがためなり
……………

歌垣は了りぬ、大いなる高塔はもえぬ、
仏らの臂あせゆき 赤きかがやきはきえ
斑鳩の壁面はその崩れを硝子もて支へらる。
飛鳥は去りつ 飛鳥は去りつ

しかも天平のバルテノンなる招提寺の朱さへ

日とともに寂び 雨とともに流れ

つひに秋篠のながれも田川となりぬ、

.....

かつて橘の三千代夫人 また燦やかし

藤三娘安宿媛の春の宴はいづこに。

泣かまほし物偲べば青摺の歌垣乙女

またありや 誘ひつれし愛の言葉よ！

このやうにして「白鳥」の詩は、天平の讚歌に迫りつき、さらにそこから飛鳥へさかのぼり、記紀の神代巻に至極してゐる。「汝は活ける水の井」などは、すぐれた神代調で、ヒューリオンではないが、ディオティーマをうたつたものではないのかとさへ思はれる。総じて増田晃の詩には、ディオティーマの影がちらつてゐる。彼は彼のディオティーマを有つてゐたのではなかつたらうか。それが誰であつたのか？ そんなことはわたくしの知るかぎりではない。しかし、増田の「白鳥」が、真に日本浪漫派のたくましい流れの中に浮んでゐることだけは、はつきり云つておかなければなるまい。「白鳥」には、著者の少年期の作品も収められて居るらしいが、それらのものも含羞のおもむきが、まことにうつくしい。また短いものにも佳品がある。次に掲げるのは「南佐久の夜の寿歌」である。

そのゐることさへ思ふ気はなく死んだだらう。

神よ そしてそれは立派なことだ。

そのしらせは幾月もたつてから

故郷の優しい娘のもとに届いてくる。

娘は聞いて目まひしつとも取乱しはしない。

生きてると思つて祈り捧げた昨日までの

不安のうちの楽しい希みだけが眼の前を

切り落ちる真紅のフィルムとなり映つてゆく。

しかし神よ、その夜更けてこぼれる娘の

泪のうちより、

ただ一人の頼りが、二人でゐた時の些少

のことが、

二度ともどらない幸ひが溢れてくる。

そしてその幸ひは二人の愛情よりもっと大きな

嵐を誕生に捧げられ また二人の約束が

新しい神々に生れかはるのを体にかんずる。

娘の耳には恐ろしい迫撃砲がきこえてくる。

かなた城門に揚るひらめきに続く雷鳴と

そして火線から送られて傷いた祖国兵が

見えてくる。

女山のやすらかな裾原の

夜をひびきゆく瀬音、

その水音に耳澄ますものは

月光に銀の鬚研ぐ男山、

また曙がたいつも霧を孕む

優しく煙りこむ深い谷々、

また答へさへなき木魂、

妻を呼んで寂しく鳴く梟ら

また夜霧に濡れた丹や紫の躑躅に

踊りつかれた仙女の一むれ……

うつくしいではないか。そしてここにもディオティーマの影がこまやかに揺れつつあるではないか。

さはれ「白鳥」は、日本浪漫派の代表的詩集であること、くり返して云はう。わたくしは次の「孤涯の許嫁が戦死せる夫に殉せしをききて歌へるばらあど」を、こよなく愛誦する。

耳をつんざく砲火のなかを

送るもどされる途中一人の傷兵は

炎天に照りつく酷熱のもとで息絶えゆく。

かれは祖国にのこしたその許嫁さへ

それを見るなり彼女は止める手もふりきり

赤い花の足で弾丸の下を走りくぐり

息絶えかけた一人の男にたどり寄り抱きすがる。

その男はもう眼も利かないで（たとへ利いても

恋人の抱く手など見むきもしまい）

野天の狂はんばかりの酷熱に息絶えてゆく。

そのたまゆら流れ弾のひとつは恋人を

抱きしめてゐる娘の熱もつ心臓を射ぬき

折かさなつたまま殺してしまふ。

翌朝人人は冷いその娘をかかへ深い沈黙にしづむ。

しかし人人よ 悲しむなかれ この恋人らは

不思議な逢会に抱きあひむしろ嬉しんで

大空に諸手ひらく父なる神へと翔りゆく。

神のわれらを召し玉ふ、憂のこの世に

果されし時なり、

されば愛の如何を知るものこそ必ずや

ここに至るであらう。

「白鳥」は、これらのすぐれた詩篇、またそれ以外にもいくたのうつくしい詩篇を収めて、しづかに今このときも、われらの尽きぬ流れを「すべつてゆく。」しづかに、はげ

しく、うたひながら、今このときを、それは蒼白な炎にも
えた、重おもしろい抒情の鳥である。

アンケート

富士 正晴

増田晃氏についてその名前は記憶しているのに、その生涯と作品について何一つ知らぬことに今気付いてびっくりしています。

宮崎 智恵

一、日光尊者 増田晃（コギト詩集収）

日光があなたの足許にかがよふた。

低い声がああなたの耳もとでかう囁いた。

（略） —にはじまり

ある日 三月堂の大扉が左右に開かれ、

日光のかがよひはあなたの足許に雪崩寄った。

「おまへはもはや仏像ではない。

おまへの夢はおまへ自らの姿だ。

おまへはまさに天日、そして既に私だ。」

かうひくい声がああなたの耳もとで囁いた。

—に終る。

二、増田晃その人は存じませんが、この詩をよむと心
たかまり、生命を感じます。

随想・蔵原伸二郎

小田 嶽 夫

蔵原伸二郎が昭和四十年の三月に亡くなったときは、何
だか自分の軀のなかにぽっかり穴が明いたような気がし
た。大正十二年（当時私は二十二歳何箇月）からのつきあ
いで（戦争以後は住居が遠くなりめったに会わなくなっ
ていたが）青春時代の十年間ぐらいの生活を互いに分け合っ
ていた仲だったからである。つい最近木山捷平が亡くなり
（葬式が一昨八月二十六日）、彼とも長い交遊で、ただそれ
は中年に入りかけてからのものなので、蔵原の場合とは少
しちがうが、さいごまでよく会っていた仲でもあり、大き
いショックだった。そんな状態なので、執筆を引き受けは
したものの今これを書く、ペンはひどく重い。

私は前に「文学青春群像」という自著に、冒頭に蔵原の
ことを可なり長く書いてい、又蔵原の死の直後雑誌「宴」

に短いものを書いてもいる。なるべくそれらとの重複を避
けたい気持だが、幾らかでもまとまりのあるものにするた
めには、それは無理のようだ。それについて予め読者の御
諒解を得ておきたい。

私が蔵原とはじめて会ったのは、私の中学（新潟県立高
田中学）時代の同級生で、当時慶応の文科へ行っていた佐
藤麟太郎（故人）の渋谷の家だった。そこで二度ほど会
ってから、私たちは佐藤とは関係なしにつき合うようにな
った。佐藤は金満家の長男（右の彼の家も東京別宅）で、
文学は好きだったが、文学で立とうなどとは思っていない
人間だったので、彼を度外視した蔵原との私の交りを何と
も思っていなかった。

私はと言えば、東京外語を出て、世話する人があって外
務省へ勤めたばかりであったが、私は勤めはじめてすぐ、
自分が勤め人に向く人間でないことを自覚し、前から好き
だった文学（小説）を、本腰を入れて勉強しはじめていた
のであった。

彼はその頃大塚辻町の、電車通りからちよつと引っ込ん
だところに、二た間の家を借りて、ひとりりで住んでいた。
少し前まで或る友人と二人でいたのだが、その友人がどこ
かへ移り、そのあともそのままそこに居つつづけている、の
だとのことであった。

彼はまだ慶応の学生だったが、学校へは殆ど行っていない

いふうで、だが却て外国語学校の夜学のロシア語科へは熱
心に通ったようであった。私がお家へ時々行くようにな
った頃は、もうその夜学へ行かなくなっていたような気も
するが、そのところ記憶がはっきりしない。

ロシア語をやったせいもあるだろうが、もともとロシア
が好きだったからでもあろう、近所にある、白系露人の娘
がいるというカフェ（場末の安カフェらしい）へよく
通っていたふうだった。その亡命の哀れな娘に大分惹かれ
ていたらしい。その娘がチェホフを読んでいる、と言って
ひどくよろこんでいた（チェホフはインテリでなくても、
じつにらくに読めるのだ、ということとその時間いた）。

ロシアと言えば、蔵原の容貌——というよりは目が、ふ
つうの日本人とはずいぶん違っていた。瞳が鶯色で、切れ
目は長く尖っていた。蔵原の先祖が阿蘇族の主流というこ
とは後になって知ったが、私より古くから蔵原と友人だっ
た青柳瑞穂君の後年言うところによると、彼は先祖が阿蘇
族ということ誇りにしていると同時に、目が青かったこ
とが、やっぱりロシア人の血が入っていると自慢の
種にしていたという（これは矛盾のようだが、大きく「東
洋」という意味でロシアに憧れていたらしい）。

蔵原は小説を書くつもりで、小説を勉強してい、そうい
うことから私も彼と親しくなったのだが、彼はそれまでに
詩をずいぶん書いていた。詩作にすべてを注いでいたのだ

った。それらの詩を私は見せられたが、そのユニークな詩に私は驚かされた。

そのうちの二篇ほどを左に紹介させてもらおう。

胡瓜の歌

ああ おれは生胡瓜が喰ひたい

なまきうりが喰ひたい

しめつて 暗い田舎の自然で

山かぜに吹かれ にがい胡瓜が喰ひたい

にがい思想を飲み込むやうで

新せんで

遠く 小さな火山の火をば眺めて

じつとみつめて

生きうりの青い汁がのみたい

星の光と一緒にのみたい

いんきくさい山の畑で

ぼうつと

満開の梨の花の憂鬱に てらされ

ああ 孤独な黒犬が足許に坐つてゐる

……………

おれのいんきな原始の黒犬よ

いつしよに胡瓜を かじつて

あの日暮の火山地の高原へ

当時、少し前まで慶応での学友として親しくしていた青柳瑞穂君、奥野信太郎等とも遠ざかり、まったく孤独に暮らしていたこと、その目が遠いどこかを見つめているような幽暗な趣のものであったこと、浅黒い色の脚が細く長く、剽悍な感じであったことなどから、いかにも彼にびつたりであることが感じられた。

彼の詩が萩原朔太郎から大きい影響を受けていることは確か（但し私は当時まだ朔太郎を知っていなかった）であり、事実彼は朔太郎に深い尊敬を払って、「あんな人死んでくれなけりや仕様がな」とまで言っていた。又朔太郎について「あんなえらい詩人でも食って行けないんだからなあ」と、叫ぶように嘆いていた。詩に強い情熱を抱きながらも、彼が小説を勉強しているのは、もっぱらその詩人の収入の問題に基いていたのであった。

此の「未刊詩集 狼」は、十六年後の昭和十四年にはじめて「東洋の満月」と題して本になった。昭和九年から十年にかけて一年間同人雑誌「コギト」に一部を発表したが、それからでも出版までには四年間かかったわけである。日中戦争がはじまるまでは、ほんとうの脚光は浴びせられなかったのであった。もちろんこの詩集には「狼」以後のものも或る程度はあるが、主要なものは皆「狼」内のもので「コギト」に発表のときも殆ど手は加えられていなかったように思う。彼は大正十二年時代に、もう立派に完

去つてゆかう 去つてゆかう

狼

雪原の奥に、遠く 牝をよぶ狼の声である
いんうつな さかんなる吼声である。野獣の感ずる
奇怪な現象の奥の奥なる実在の世界である。宇宙
の変異を感ずる孤独なる動物の魂である。病霊の
おののきである。暗夜雪原の果におののき跳躍す
る青い狼である。私である。

私は孤独に病んでゐる 私は飢ゑてゐる。あら
ゆるものに欲望する。ああ私は欲望するものに敢
然としてをどりかかりをどりかかる。

かの美はしき女に、生々しき肉体に、不思議な
思想に、かの東洋的な朱黄色の果実に。

あゝ さうして現象の底の底なる、地獄の満月
について 遠く遠く吠えかかる。

暗夜の地平を越えて遠く遠く跳躍する。

彼はこれらの詩を「未刊詩集 狼」と題し、ひそかな自信に燃えていた。私は詩の方面には暗く、又私の情緒、趣味とはあまりにかけはなれていたが、これらの詩はよくわかり、又非常に感心した。

それらを私がどう感受したかということは略すが、彼は

成された詩人であったのだ。

○

私は昭和十三年八月に、杭州領事館在勤を命ぜられ、中国へ渡ることになった。これから三、四年も日本を離れることは、自分の文学修業に不利だと思つて、私は大へん悩んだ。と言つて命令に従わなければ止めるより仕方なく、止めればその日から路頭に迷うことになる。私は観念して出かけた。

翌年のいつごろだったか、私は蔵原の散文詩のような作品の載つた「葡萄園」という同人雑誌を蔵原から送つてもらつた。この雑誌は私が日本から離れる前からあり、同人の久野豊彦氏のものがちよつと問題になっていた。蔵原は久野氏だか他の同人だかを識っているふうな口振りだったが、私は彼がその同人にたのまれて寄せたものとはばかり思つていた。

ところが翌十五年の夏、中河与一氏が一人で杭州へやつて来、私は氏を案内して西湖上へ舟を浮べることになつたが、そのとき「葡萄園」の話をし出して見たら氏はよく知つてい、それで更に蔵原のことを言つたら「毎月のように書いていますよ」ということであつた。それで私は彼がその同人になつてゐることをはじめて知つたのだつた。

私が中河氏に会つて彼の消息がわかつた、ということをも

よろこびを以て手紙で知らせると、彼から直きに返事が来て「葡萄園の同人にならないか、そして早速作品を一篇送ってもらいたい」と言ってきた。

私は年の終りごろ「傷心の町」という短いものを送り、それが翌昭和二年の二月号に載った。併しその雑誌を見ると、久野氏や蔵原等はどう引込んでゐるらしく、新しい名前の人だけが書いていた。これはもっと後に知ったのだが、その二月に春陽堂の文壇新人叢書の一冊として、蔵原の「猫のゐる風景」が上梓され、久野氏のもそれより少し先に出ていたのだった。だから彼等はどうその同人雑誌は殆ど必要が無くなっていたのだった。

私は昭和三年の五月に帰国し、はじめは本郷五丁目の下宿屋にいたが、翌年結婚することになって、蔵原の住居に近い杉並区成宗に居を構えた。蔵原は阿佐谷駅近くに住んでい、むろん結婚もし、男の子も一人出来ていた。

蔵原は文壇新人ということになってはいたらしいが、併しその頃はマルキシズム文学が文学ジャーナリズムを席捲していた時代で、小説家としての「芽」はなかなか出なかった。況んや私の場合は全く海のものとも山のものともわからないのだが、私は結婚一年後にばかりか、気が狂ったかと思われるような唐突さで、外務省を止めてしまったのであった。当時は不況のどん底で、失業者が巷にあふれていたのだから、私の行動はたしかに奇矯と言える。

言っておやしていたが、なかなか泣き止まなかった。そのうちに蔵原は起き上り、蒲団の上に立ちはだかつて「なぜ泣かすっ、黙らせろっ黙らせろっ！」と吼えるように怒鳴った。

蔵原は神経質というのではなく、子供が泣くと自分のどこかが痛むような苦しさを覚えたものらしい。私はむしろまだ子供が無くて、そのへんのところはわからず、ただそのひどい剣幕に驚いたものだった。

蔵原は近所に住む青柳君と同様骨董が好きだったが、又動物を飼うのが好きだった。骨董と動物は愛玩ということ共通点があるのかも知れない。目白を何羽も飼っていたことがあり、うぐいすの時もあった。河鹿を飼っていたこともあったが、私の知っている最後は小さい日本犬だった。私も彼から目白を一羽もらったことがあり、ただ私はすり餌をすったりするのを面倒くさがる性質だったが、彼はいつもそれを楽しそうに悠々とやっていた。

彼の、飼っているものに対する研究は非常に周到なものだったが、或るとき鳥籠について「あの大きさとこのものはじつによく出来ている、あれよりちょっと大きくても小さくてもいかに、じつに完璧な大きさだ」と熱っぽく感激の口調で語ったことがあった。

彼は原始をたつとんでゐるくらいだから、迷信ぶかいところがあつた。

私の場合は前途は不安に満ちてゐるのだが、蔵原の場合にはちがっていた。彼は学生時代から引きつづき、上海で医院を開業している令兄からの仕送りを受けてい、貧しくはあつても、日々の米塩には事欠かなかつたのであつた。

蔵原は「惟光」という名の一人っ子(彼の本名は「惟賢」)をひどく可愛がっていた。私が帰国して間もなくの、本郷の下宿にいた頃、惟光君は数え年四歳だったが、疫痢にかかり、危険状態になったことがあつた。そのとき彼からそれを知らせる葉書が来た。ごく簡単な文句で、さいごに片仮名で「ヒジョウウニカナシイ」とあつた。その一行がいかに効いていた。

私はすぐに阿佐ヶ谷へ駆けつけ、河北病院の隔離病室に惟光君を見舞った。惟光君は眠っていて、何かの液の注入を受けていた。

「今日がどっちに向うか峠らしいんだ」蔵原は囁くように言つたきり、夫人といっしょに、またたきもしないで惟光君の顔をみつめていた。部屋の空気がすっかり凝固しているみたいで、私は呼吸が苦しかった。

翌日から惟光君は快方に向つたが、惟光君のことではもう一つ思い出がある。此の病気の前だったか後だったか、私は彼の家に泊つたことがあつた。夜中に目がさめたが、惟光君がさかんに泣いていた。蔵原は「泣かしちゃだめだ、泣かしちゃだめだ」と啻強く言い、夫人はしきりに何か

彼の骨董好きがそうさせたのだが、或るとき彼は夜更けから、近所の墓場にある、かねてから気に入っていた石地蔵をぬすんで来た。可なりの重さのものだったらしい。ところがその翌日から彼の首がまがらなくなった。彼ははてつきり仏罰が当たつたのだと思ひ、その夜こっそりそれを墓場へもどした。すると翌日から首がもと通りにもどつた。

その話を彼は感動深げに語つたことがあつたが、私はそのあまりにも単純な迷信ぶりよりも、彼が夜中にもう一度その地蔵をこっそり運んで行く姿を思い、それが可笑しくならなかつた。

志賀直哉氏にこれと似たような話がある(子供さんの病気が急に悪化した)が、志賀氏は不安と恐怖とたたかいつづけ、遂に地蔵をもどさなかつた、というのだが、蔵原の場合は全く子供のように無邪気であつた。

蔵原の骨董のことでは、後年青柳瑞穂君が次のようなことを言つた。

「彼は人のものはよくわかる男だが、自分のものはわからないんだ、これは不思議だ、だからぼくはものを買うと必ず蔵原のところを持って行って、意見を聞くのが楽しみだつた。ぼくがそうじゃないかと思うことを必ずちゃんと言つてくれるんだ。蔵原の鑑賞眼というのはきびしくはないが、非常に正しいんだ」

これと同じようなことが小説の上でもあつた。彼は小説

の批評ではなかなか傾聴すべき言をよく吐いたが、自分のものことになると、そうはいかなかったようだ。昭和七、八年ごろだったか、はじめて「文芸春秋」に「裏街道」という短篇を書いたが、それを書き終えたあと、来る人来る人に読ませて、感想を言わせていた。

○
木山君の死で心が重く、此の原稿も気乗り薄で、十枚は書けまいと思っていたのだが、いつのまにか十枚を半ば越した。こうだから書いてはいつ終るかかわからない。少し急ぐことにしよう。

蔵原の「猫のゐる風景」時代の作品は、どこか佐藤春夫の「田園の憂鬱」系のを追ったようなところがあり、彼の独特の官能、感覚を生かした散文詩風のものであったが、以後彼はリアリズム風のを心がけ、人間を書くことに努めるようになっていた。ただ「猫のゐる風景」時代もそうだが、作品に出てくる人間は、大凡気の弱い、そして、うらぶれて、人生の裏街道を行くような人間であった。それは蔵原の趣味だとも言えたが、ただ蔵原自身可なり気の弱い人間であった。

彼の詩やエッセエは、人の思惑などを気にしない、どこまでも我が道を行くという概の、強い感じのものであり、それから考えると、彼は直情径行の、非社交的な、毅然と

じめは大森区だったと思うが、間もなく世田ヶ谷区へ移った。その去り方が何だか逃亡でもするようなふうだったが、そして彼は以後小説の筆を絶った(例外として一、二篇の作はあったようである)。

蔵原があれだけ熱心に勉強し、又数々の佳作を書いた小説からどうして訣別したかが、私にはいつまでも疑問で、だから蔵原が死んだあと、彼についての小文を書いたとき、私は此のことに触れた。が、そのとき述べた感想とは、今は幾らかちがった気持ちになって来ている。

彼は彼の詩的才能を自ら圧殺し、圧殺して来た(私たちはさっきも言ったようにそれを特に意識しなかったが)わけだったが、そして彼のなかの別のどの程度あるかはっきりしない才能を掘り出すことに努めていたわけだが、それが彼にはひどい苦痛だったのでは無いのだろうか。そして或る日突然彼は「小説なんて、こんなばかばかしいものはもう止めだっ！」と決意したのでは無いだろうか。

ここまで書いてから思い出したが、彼が「コギト」に詩を連載したのは、昭和九、十年であり、彼が亡くなってから出た「蔵原伸二郎選集」(詩作品と詩論だけ)の年譜には、「昭和九年『東洋の満月』の詩篇の一部を『コギト』に連載(昭和九年九月号―昭和十年八月号)。朔太郎の激賞を受ける」の一節がある。これを読み返して見て、私は前述の私の考えにはば自信を抱くことが出来た。つまり彼は

した、むしろ狷介な人間と取られるのが自然とも言えるのだが、事実は、今言ったように気が弱く、そして人づきあいは至極いいほうであった。

大体表面の感じは九州人的な、どこかごつく、荒っぽく、いながら、非常に敏感な性質で、人の気持などもわかり過ぎるぐらいのところがあり、そしてその人の気持を無視出来ない、そんな点ではむしろ優柔不断のところが多分にあった。あの詩作の上での、信念と情熱に燃えた決然とした態度とのあいだに、たしかにそこには或る矛盾があった。(併しその当時はそんなことは思っていないかった。私は彼の詩のことは半ば忘れたようになっていたし、作家として成長して来ている面だけを見ていた。)

蔵原をも含めて、私たちは昭和六年から八年まで「雄鶏」(のちに「麒麟」と改題)という雑誌をやったが、そのあいだ蔵原の家は、位置が駅から近くて便利でもあり、又文壇的にもっとも先輩に当たってもいたので、多くの同人がよく彼の家に出入りしたが、その頃の彼と、大塚辻町に一人で孤独でいた頃の彼とを比べると、たしかに人間が違ってきていた感じであった。それは多分孤高な詩人であろうとしていた彼と、人の世の中へ入った小説家であろうとする彼との違いであつたろうし、べつにそのときは私はそのことを特別に何とも感じていなかった。

ところで、彼は昭和十年ごろ突然阿佐ヶ谷を離れた。は

一年間旧作の詩篇を連載しつづけ、そのあいだ讃辞や好意的批評も多く聞き、又旧作ではあるがそれを活字にすることによって、詩精神が自身のなかに復活し、かくて、彼は彼のふるさと、詩へ向って、決然と羽ばたいたのではなからうか。

詩人から小説家へ変った人は何人かいるが、詩人から小説家へ変り、更に詩人にもどつたのは、我が蔵原伸二郎のほかに私は知らない。

蔵原は昭和二十一年以来さいごまでの大部分を埼玉県飯能市に住み、文字通り孤高の生活を送った。昭和三十九年に、同市の詩誌「陽炎」発行所から上梓された第六詩集「岩魚」によって読売文学賞を得たが、それが決定したとき、彼は芝の北里研究所附属病院に入院中であつた。不治の病白血病に侵されていたのであつた。

「岩魚」について詳述することはここでは避けるが、彼は戦後も「東洋の満月」の土台から降りるということはなかった(彼は終戦直後一部のものから戦争犯罪者みたいに言われ、苦しい一時期があつたようであつた)。ただ全体的に、以前の高声が低声になり、渋く、深くなったのであつた。巻中の「狐」の一聯などは神品と言える。

彼は読売新聞社での受賞式には出席できなかったたので、「陽炎」同人の町田多加次氏に「受賞の言葉」を口述した

が、その中心の部分を左に紹介する。

「さて、もともと私のことを、世間では東洋的な詩人だと称していますが、決してそれに不服は申し上げませんが、私は特に東洋的な意識をもって書いて来たのではなく、ただ自然な状態において、東洋的であり、日本的であることはきわめて当然なことであると思います。たとえば、ロダンやセザンヌがフランスの自然を愛し、また同時にフランス人であったのと同じことではないかと思えます。私は、これまでできる限りヨーロッパの詩論や詩も研究して来たつもりであります。と同時に東洋には、以心伝心的な東洋独特の詩論がやはり存在し、その一面を代表するものは禅の考え方ではないかと思えます。これは、ヨーロッパの詩論とある意味において対立した考え方もありません。私は生涯の念願として、この二つの東西の詩論をなんらかの形でまとめたいと考えながら、工夫して来たつもりですが、それにもかかわらずご覧のような出来ばえで、誠にお恥ずかしい次第であります」

彼の大きな自負のうかがえる言葉だが、それにもう一つ、彼が受賞のを知ったとき、右の町田氏に語ったという言葉をつけ加えよう——「おれの詩をわかってくれる奴もいたんだなあ……」

三、私の立場としては、文学もとくに詩に於ては「詩に瘦せる」の言葉が正しく、その表現がどうであろうと、作者自らの、また、自ら生きた時代の証言でありたいと念願します。

田中冬二

- 一、「岩魚」
- 二、二行目の——あまりに生の時間が重いので——に蔵原さんの心境がよく窺われ切ない思いがする。蔵原さんのエスプリが凝っている。
- 三、現代の文学は、あまりにマスコミに乗りすぎている。マスコミなど超越しなければ真のよき文学は生まれなれないと思う。

石坂洋次郎

- 一、二、晩年の定本「岩魚」の中の一連のきつねを詠んだ作品。自分を大自然の中に無理がなく溶けこませた深い味に牽かれます。
- 三、ヴェトナムに於けるアメリカ、チェコに於けるロシア日本国内では大学生達のスト騒ぎなど、世界は誰も分らない未来を開きつつある証拠だと思えます。

一、詩集「岩魚」

緒方昇

アンケート

棟方志功

一、蔵原伸二郎様では「目白師」「狸犬」といふ二つの小説をとて恐ろしい程立派だと身魂を洗はれました。また「蒼鷺」といふ詩や「コンロン」（これは漢字です）「岩魚」の全部

二、蔵原伸二郎氏は人も詩も生活も、亡くなつてからで美しいです。あんなに立派な生涯と後生を続けてゐる蔵原伸二郎氏を想ふだけでも、わたくしも立派になつて行く様な融通を大頂戴いたします。

深尾須磨子

一、いつか東朝の「一冊の本」欄に書きましたとおり蔵原さんの定本詩集「岩魚」に収録の、およそすべての作品に感銘しました。

二、戦前と戦中の蔵原さんにたとえば多少の迷いや考え違いがあったとしても、この詩集をおとして知るかぎり、一切の不純を純粋にまで還元、清流に沈潜する一尾の岩魚そのものになり、絶えずいのちと詩と対決した蔵原さんの姿が、自らの立場を越えて苦しい迄に胸を打ちました。主義主張に先立つ人間詩人として、蔵原さんの他に詩人なしと思えます。蔵原さんのような詩人が大切にされ、安住される国、と考へれば考へるほど暗然とならずにはいられません。

二、晩年の、もっとも成熟した時期の詩風。

三、戦時中の詩集「東洋の満月」が、一般に、彼の代表作詩集といわれてきたが、人間および思想が、時代の流れに左右されて、いまだ完成の域に達してゐたとはいえない。それに比べると、前記「岩魚」は、彼の全人生を投入して、文学という手段を通して、世界に問ひかけていると、私は思う。

町田多加次

- 一、最後の詩集「岩魚」の諸詩篇。
- 二、氏の詩学が、極めて具象的に、ほぼ完全に、表わされたと考えられるので。「めぎつね」の美しさ。「老いたきつね」の、蔵原伸二郎そのものでもあるし、蔵原伸二郎が生んだともいえる、時空を超えて生きる、まったく新しく生成された狐の姿。蔵原詩は、あらゆる時間の共存する海に、美しく明滅して浮かぶ生命の実存をとらえて、ついに宇宙そのものの相貌を示した、と私は考えています。
- 三、不勉強で文学について語る資格はないと思つています。ただ最近、詩人とはたいへん不幸な怠け者だな、という気がしています。思考ばかりが拡がってしまつて。